

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 高岡市立成美小学校 (※正式名称を記載)
種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}
 中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校
 教員養成大学 専修学校、各種学校
 特別支援学校
 その他 (例：小中高一貫)
所在地 〒933-0917 富山県高岡市京町1番1号
E-mail eseibis04@city-takaoka.jp
Website <http://seibi-e.el.tym.ed.jp/>
幼児児童生徒数 男子 171 名 女子 138 名 合計 309 名
幼児・児童・生徒の年齢 6 歳～ 12 歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

I 研究主題

身近な事象 (人・もの・こと) に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成を目指して

II 成美型 ESD 教育の重点

本校では、「自立」と「共生」を教育目標の柱とし、全教育活動を ESD の視点で見直し、教育課程に位置付けての ESD の研究推進を図ってきた。実践においては、「ESD の視点に立った学習指導で重視する 7 つの能力・態度」から重点的な視点を選択し、授業を構想した。そして、ESD の学びが実践を伴った力として発揮されるよう、自分のことだけでなく、周りの人や未来に生きる全ての人が幸せになるような、よりよい社会をつくらうとする子供の姿を期待し、以下の 3 点から主題解明に取り組んだ。

① 主体的な学びを生み出すための単元構想の工夫

- ・子供にとって学ぶ価値のある教材の開発や学習課題の工夫
- ・子供の心を揺さぶる体験活動の工夫
- ・他教科との関連を意識した学習活動の工夫 (ESD の視点を生かして)

② 関わりやつながりを通して、学び合う場の工夫

- ・子供にとって必要感のある話合いの場の設定
- ・関わりやつながりを生む学習形態の工夫
- ・体験活動を生かした言語活動の工夫

③ 確かな学びをつくるための評価と指導の工夫

- ・課題やまとめを明確にした授業づくり
- ・自分のよさや高まりを実感できる評価の工夫

Ⅲ 成美小学校 ESD 年間研修計画

(○の数字は実施日)

月	研修内容 と 取 組		
	ESD	教師力向上研修	
4	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題の設定 研究計画の立案 今年度のESD研修の共通理解 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一授業研究計画 	<ul style="list-style-type: none"> 成美スタンダードとチャレンジタイムの共通理解
5	<ul style="list-style-type: none"> ESDの考えを取り入れた年間指導計画の作成(各学年) 	○5年1組 国語科(神田)	<ul style="list-style-type: none"> 若手教員研修計画(月1回) 小教研学力調査分析
6		<ul style="list-style-type: none"> ○4年1組 道徳(土合) ○1年1組 国語科(大野) ○学力向上校内研修会 <ul style="list-style-type: none"> 4年2組 算数科(高橋) 5年2組 国語科(川崎) 	<ul style="list-style-type: none"> ○小教研授業研究会 <ul style="list-style-type: none"> 6年2組 社会科(堀田) ○学力向上校内研修会
7	<ul style="list-style-type: none"> 年間計画・ESDカリダ-の見直し ⑩ESD授業作り研修 <ul style="list-style-type: none"> 講師 金沢大学 松本謙一先生 	⑤6年2組 家庭科(坂林)	<ul style="list-style-type: none"> ノートコンクール 学期末学習定着度分析
8	<ul style="list-style-type: none"> 年間計画の見直し(2学期) ESDパネル作成(11月完成) 		<ul style="list-style-type: none"> ⑩⑪⑫学校訪問研修に向けて学年部会研修会 ⑬特別支援研修 <ul style="list-style-type: none"> 「子供の実態から語り合う会」 講師 子どもと親の相談員 ⑭生徒指導研修会 <ul style="list-style-type: none"> 「実践エンカウンター」 ⑮全国学力状況調査分析 <ul style="list-style-type: none"> アクションプランの見直し 夏休み研修資料展示会
9	<ul style="list-style-type: none"> ESD指導案検討 		<ul style="list-style-type: none"> ⑩小教研授業研究会 <ul style="list-style-type: none"> 通級指導教室 自立(川口) 4年2組 算数科(高橋) ⑪学校訪問研修 <ul style="list-style-type: none"> 漢字計算チャレンジテスト
10		○知障級 保健指導(田中・林)	
11	<ul style="list-style-type: none"> ESD校内事前研修会 <ul style="list-style-type: none"> 部会・全体会 ⑬ESD公開校内研修会 <ul style="list-style-type: none"> 講師 松本先生 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥3年1組 理科(経塚) 2年1組 生活科(森田) ⑬ESD提案授業 <ul style="list-style-type: none"> 2年2組 生活科(遠藤) 3年2組 理科(遠藤) 	
12	<ul style="list-style-type: none"> 実践の振り返り 次年度の計画 	⑤6年1組 理科(中山)	<ul style="list-style-type: none"> ノートコンクール 学期末学習定着度分析
1	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ作成 ⑮ESDシンポジウムへの参加(6年) 	<ul style="list-style-type: none"> ⑮自・情級 自立(竹腰) ⑯少人数指導4年算数科(加藤) ⑰通級指導教室 自立活動(川口) ⑱6年2組 社会科(堀田) 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一授業のまとめ アクションプランの見直し
2	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ発表会 		<ul style="list-style-type: none"> 若手教員研修の振り返り 漢字計算チャレンジテスト 外国語学習について伝達
3	<ul style="list-style-type: none"> 次年度への方向付けと共通理解 		<ul style="list-style-type: none"> ノートコンクール 学期末学習定着度分析

IV 研究の実際

各学年の取組から

【第1学年の実践】

★1年生「なかよしいっぱい」

1年生は、学年の仲間や上級生との交流活動、アサガオや花壇の栽培活動を通して、周囲と関わる楽しさや喜びを味わう活動を進めてきた。

6年生とのペア活動では、1年生が手順を教わりながら花の苗を植えた。作業をする中で、言葉や態度から受けた6年生さんの花壇への思いを受け継ぎ、1年生は自分たちもきれいな花を育てていこうと、愛着をもって世話を続けた。2年生との学校探検、合同校外学習では、やさしく教えてもらったり、一緒に活動して楽しかったりした体験から、今度は一緒に遊んで楽しませてあげたいという願いにかわっていった。



「あきとなかよし」では、成美保育園の年長児を招待し、年長さんが喜んでくれるようにと、遊び方を工夫して交流を深めた。「ようこそゆりぐみさん」と歓迎の看板を掲げ、ドングリやまつぼっくり、木の葉を使った遊び道具と一緒に遊んだ。園児の様子を見ながら、遊び方を分かりやすく教えたり、励ましたりして、笑顔いっぱいの交流会を行い、成就感を味わうことができた。

【第2学年の実践】

★2年生「なかよしの輪をひろげよう」

2年生は、1年生やこまどり支援学校と触れ合いながら関わりを広げてきた。

「1年生となかよし」では、4月、1年生に学校案内を行った。全員で仕事を分担し、施設の特徴を説明したり、チューターを務めて手をつないで案内したりすることができた。また9月には縦割りで校外学習を行い、1年生がはぐれないように気を配りながら楽しく活動を進めた。さらに12月、1年生を遊びに招待した「1年生おもてなし集会」では、心を込めて手作りしたおもちゃを使い、6コーナーに分かれて活動した。遊び方を紹介したり、遊びの世話をしたりして1年生に楽しさを味わってもらうことができた。

これらの活動を通して、1年生に思いやりの気持ちをもって接し、なかよく安全に活動しようと協力し合う姿、自分が上級生になった意識をもってやさしく接する姿が見られるようになった。

「こまどり支援学校の友達となかよし」では、まず、こまどり支援学校の友達に招待され、交流活動を行った。触れ合いタイムでは、こまどりの児童と一緒に紹介されたゲームを楽しむことができた。その後、「こまどりさんウエルカムプロジェクト」を立ち上げ、今度はこまどりの友達を招待した。障害をもつ相手のことを考えながら手足が不自由でも楽しめるゲームを考えて準備を進めたり、遊びコーナーで道具を支えて補助したりする中で、支援学校の友達と自然に接して共に活動することができたと思う。



【第3学年の実践】

★3年生「成美のたからもの広め隊！」

社会科と総合的な学習の時間の関連を図り、地域の「たからもの」を見付ける活動を行った。全員で私設図書館「眉丈文庫」を訪れ、歴史のすばらしさに気付いたり、駄菓子屋「平野商店」を守ってきた人にインタビューをしてその思いに触れたりした。2学期には、発見したことを「たからもの新聞」にまとめ、友達に紹介した。このように、地域の人・もの・文化に直接触れる機会をもつことで、子供たちは、進んで地域の人と関わり、地域への愛着を深めることができた。

また、太田小学校の3年生との交流学习を進め、成美の宝物を紹介するカードを作って送ったり、実際に太田小学校を訪れて砂浜で砂像を作ったりするなどした。この交流を通して、地域の特徴の違いに目を向け、それぞれの地域のよさに気付くことができ、より一層地域への愛着を深めていくことができた。



【第4学年の実践】

★4年生「成美の小さな環境大臣」

社会科と総合的な学習の関連を図り、環境問題に取り組んだ。社会科では、安全な水道水を作るための施設や汚れた水をきれいにして川に返す仕組み（リサイクル）を見学し、もっと調べてみたいことを課題に設定して追究を続けた。家で節電することを目当てにがんばり表を作って家族に呼びかける子供、町内で行われているリサイクルについてそのよさを調べて新聞にまとめる子供等、頑張る姿が見られた。

地域の方を招待した集会では、環境について調べたことをクイズにして出題した。アルミ缶の回収を呼びかけたり、ゴミの量を減らすための情報を伝えたりすることで、自分たちで学校や地域の環境を守っていきたいという意識を高めることができた。



【第5学年の実践】

★5年生「米ニュケーション田！」

5年生は、地域の方の水田で田植えと稲刈りの体験をさせてもらったことをきっかけに、毎日食べているお米のことをあまり知らないことに気付いた。「もっとお米のことを知りたいな、調べたいな」という気持ちから、一人一人が課題を設定し、追究していった。歴史、関連する日本の文化、料理の仕方、品種改良、生長、収穫量等、子供たちは多様な視点から調べていき、分かったことや考えたことを一人一人が友達に発表した。同時に稲刈りをして収穫した米についても話し合い、半分を東北の震災以来交流している陸前高田市の方に送り、残りの半分は、お世話になった地域の方と農協の方々と一緒に食べることに決めた。

子供たちの体験や主体性を大事にして学習を進めたことで、今まで当たり前のようにあった米が、古くから日本人の生活に大きな関わりをもっていたことが分かった。この学習を通して、米をはじめとする食生活に関心をもってほしいと願っている。



【第6学年の実践】

★6年生「成美防災プロジェクト」

6年生は、東日本大震災以降、総合的な学習の時間に、防災教育に取り組んでいる。今年度は、「陸前高田市に住む方との交流を続ける」「命を守るために、私たちにできることを考える」という2つの活動に取り組んだ。

町内の「いきいきサロン」や「ぴよママサロン」で地域の方と触れ合い、お年寄りや赤ちゃん連れの方の避難について考えることができた。また、命を守るために私たちができることをグループで考え、調べ学習を行った。避難所までの安全な経路を表した防災マップを作ったり、災害備蓄庫に保存されている物を調べたりと意欲的に取り組むことができた。調べて分かったことは、感謝の集いで地域の方に伝えたり、3.11集会で全校児童に広めたりして、防災意識を高めることができた。



V ESD 研修会の実際

○ 2年生活科の実践から 授業者 違 かおり

1 単元について

本単元は、身近にあるものや自然を利用した遊びや遊びに使うものを工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなで楽しみながら遊びをつくり出そうとすることをねらいとしている。また、風やおもり、ゴム等をおもちゃの動力源として使うことは、3年生で学ぶ理科の内容につながると考える。

本学級の子供たちは、1年生の生活科「あきであそぼう」で、ドングリごま作りや落ち葉の洋服作りをするなど、自然物を生かした遊びを楽しんだ。また、「むかしのあそび」では、友達と競い合ってコマを回したり、教え合っあやとりをしたりするなど、友達と関わりながら遊ぶ楽しさを味わってきている。

本単元では、牛乳パックやペットボトル、段ボール等の身近な材料を使って、ゴムや風、おもり等の力を利用した動くおもちゃをつかって遊ぶ学習を展開する。導入では、教師が多様な手作りのおもちゃを紹介し、遊ぶ時間を設定することで、子供たちが自分も作ってみたいという意欲をもてるようにする。また、おもちゃ作りヒントコーナーを設置し、参考となる図書を展示するなど、おもちゃ作りの発想を広げるための環境を整える。そして、制作の過程では、同じような教材や動き、遊びを考えている子供と一緒に活動できるような場を設ける。そうすることで、競い合ったり力を合わせたりするなど、関わり合っ取り組む中での気づきが生まれると考える。さらに、遊びながら改良を加えたり交換して遊んだり、十分におもちゃと遊ぶことで、他の人にも広めたいという気持ちをもつようになるだろう。そこで、一緒に学校探検をし、校外学習に行くなど、4月から交流してきた1年生を招待したいという思いをもてるようにしたい。1年生に喜んでもらうために遊び方を工夫することで、約束やルールの大切さに気付くとともに、自分自身も楽しみながら遊びをつくり出そうとする姿を願っている。

2 指導の実際と考察

(1) 遊びたい、つくりたいという意欲を高める手作りおもちゃの紹介

導入では、教師が手作りおもちゃを紹介し、遊ぶ時間を設定した。様々なおもちゃを手に取り、実際に遊んでみることで、動くおもちゃでもっと遊びたい、自分でも作ってみたいという意欲を高めることができた。また、風やゴム、おもりを使ったおもちゃを提示することで、動く仕組みや力の働き方に興味をもち、自分で作るおもちゃ作りへの発想をふくらませることができたと考える。

また、子供たちが発想を生かした楽しいおもちゃをつくるには、豊富な材料が欠かせないと考え、事前に牛乳パック・ペットボトル・新聞紙等の廃材や輪ゴム・ストロー等の材料を集めておき、材料コーナーを設置した。必要な物を自由に使える環境を整えることで、子供の思いや願いを途切れさせることなくおもちゃ作りに取り組み、遊びを広げることにつながることをできたと考える。

(2) 友達との関わり合うことのできる各コーナーでの情報交換

自分が作ってみたいおもちゃの設計図を描いてみることから活動をスタートした。その設計図を掲示したことで、自分と似たおもちゃや、仕組みが似ている友達と見比べたり、相談したりすることにつながった。

毎時間の授業の始めに、一人一人の今日の活動内容を黒板に示すことで、やりたいことが明確になるとともに、友達の取り組みにも関心をもつきっかけとなった。

作る・試す・楽しむを連続的に行えるように教室ではなく広いスペースを活動の場とした。また、材料コーナー、道具コーナー、作るコーナー、試すコーナーを設けることで、よく似た活動をしている子供が集まり、自然に情報交換や教え合いが生まれた。

さらに、授業後の話し合いではうまくいったところや困っているところを実際のおもちゃを動かしながら意見を出し合ったことで相手を認めたり寄り添ったりすることにつながった。

2年生活科の実践から

金沢大学教職大学院 教職実践研究科 教授 松本 謙一先生

1 指導の内容と指導助言

(1) 子供の思いをふくらませる課題のもたせ方

導入で本時の活動の目当てを確認する際に、子供たちと教師の意識にずれがあったように感じられた。「もっと楽しくなるおもちゃを作ろう」という課題に対して、子供たちは具体的に「もっと」のイメージをもてないようだった。

低学年の子供たちには、このように教師の思いとのずれが生じやすい。黒板を活用して、本時でねらうことを「完璧に楽しいおもちゃができていますか」のように問いかけ、「今、自分はどこですか」とネームプレートを貼らせる。こうすれば、学習課題にあった活動が生まれたであろう。

子供の発言の中に友達のことを考えた発言があった。「友達のことも考えている〇〇さん、ステキだね」と取り上げる。それだけで子供たちの関わり合いが変化する。友達の様子に目がいくようになる。友達のよさに気付く発言が出てきて、授業の質が上がる。友達とも関わりの中で、自分をメタ認知できるようになると、次は「もっと」やってみたい、こうしてみたいなど、次への課題が子供の中から生まれてくるのである。



(2) 子供たちが真に楽しむ活動にする仕組み

「作るコーナー」「ためすコーナー」の場づくりが効果的だった。子供たちが関わり合いながら生き生きと活動している場面がいくつもあった。E児は「まっすぐ走らせたい」という願いをもって車のタイヤを作っていた。「作るコーナー」で一緒にタイヤを作っている他の子供に、手を止めて教えていた。教えてもらった子は、とても嬉しそうに話を聞いて作り直していた。

子供たちの姿からは、「まず、自分のおもちゃを作りたい」という思いが強いことも分かった。M児は空気ロケットを作っていたが、ビニール袋が破けてしまった。すると、自分の持っていた材料を工夫し、何度も失敗しながら作り続けていた。自分のおもちゃ作りにとことん取り組むことができる場が保障されていた。



教師は活動の時間、一人一人の子供たちの様子に目を配り、適切な助言をしていた。F児は、自分のおもちゃはできあがっており、「おためしコーナー」で友達と一緒に試していた。教師が「競争しているのかな」と声を掛けたことで、F児には初めて「おもちゃで友達と競争したら楽しいのかな」という考えが生まれたようである。F児は振り返りカードの今度したいことに「友達と競争したい。友達のおもちゃも使ってみよう」と書き、次時に活動をつなげていた。

2 講評

自分のおもちゃを大事にして作っていた。一生懸命作っていると、「おためしコーナー」のような場の工夫には、なかなか目がいかない。本当に自分のおもちゃは、まっすぐ走するのか、速く走するのか、よく飛ぶのか。「もっと」を学習課題にするのなら、そういうことをメタ認知できる仕掛けを作ってやるとよい。走らせるコーナーにコースを作るとか、ストップウォッチを置くとか。子供たちが本当に楽しむことが大事である。

「1年生を招待しよう」と、提示したところからが肝心である。「昨年やってもらったから」では意味がない。やるからには「昨年とは違うことをしたい」と、言えるほどでありたい。そして2回はしたい。1年生に他者評価してもらおう。評価されることで子供たちから「もっと〇〇したい」という課題が出てくる。本気で取り組みたい。そうやって2年生も、招待される1年生も「学び」をつくっていくのである。

○ 3年理科の実践から 授業者 遠藤 舞偉

1 単元について

本単元は、電気の通り道について興味・関心をもって追究する活動を通して、電気を通すつながり方と通さないつながり方、電気を通す物と通さない物等を比較する能力を育てる。さらに、それらについての理解を図り、電気の回路についての見方や考え方をもちることができるようにすることがねらいである。

子供たちは、3年生から始まった理科にとっても興味をもって学習を進めている。「ゴムのはたらき」「風のはたらき」の学習では、ゴムの伸びの長さ・数を変えて調べることや、風の強さを変えて調べることで、事象を比較して考え、その性質を理解した。また、単元の終わりには、ゴムや風のはたらきで動くおもちゃを作ることで、それらの性質やはたらきについて理解を深めた。

そこで、本単元では、導入で様々な仕組みをもつ明かりのつくものを提示する。子供たちは、明かりがついたり消えたりする様子を見て、「どうして明かりがついたり消えたりするのだろうか」という思いをもつだろう。そして、進んで実験に取り組み、明かりがつく時とつかない時のきまりに気付いていくと考える。また、実験を行う時には、試行錯誤して事象を比較しながら調べ、電気の回路についての理解を図る。そして、単元の終末では子供の思考の流れを大切にしながら明かりがつくものづくりへとつなげる。子供たちが追究意欲を高め、主体的に問題を解決していくことができるようにしていきたい。

2 指導の実際と考察

(1) 子供が主体的に取り組むための導入での明かりがつくおもちゃの提示

学習意欲を引き出すために、導入では3種類の明かりがつくおもちゃを提示した。明かりがつく仕組みが異なるおもちゃを提示することで、「どうして明かりがついたり消えたりするのだろうか」という疑問が生まれた。子供たちは、明かりをつけることに興味をもち、学習意欲が高まり積極的に課題に取り組むことができた。

(2) 学び合いを深めていくためのグループ学習

単元を通して、実験はグループで行った。電気を通す物と電気を通さない物を調べる実験では、グループで調べるものを決め、一人一人が予想し、テスターを使って実験をした。その後、調べた結果を基にグループで話合うことで、全員の結果が一致したときが電気を通すものであると断定するようにした。グループ内で違う結果が出たときや自分の予想と異なった結果になったときは、話し合っただけで再実験をする姿が見られた。グループ学習を取り入れることで再現性や客観性が高い実験となり、科学的な見方や考え方が育っていった。

(3) 見通しをもって問題解決をしていくためのワークシート

ワークシートには、学習課題、予想、実験方法、結果、考察、理科日記の欄を設け、記録していくことで問題解決する過程が分かりやすいように工夫した。理科日記には、今日の授業で分かったこと、今後調べたいこと等を書くことで、新たな課題をもち、さらに意欲的に学習に取り組むことができた。

3 年理科の実践から

金沢大学教職大学院 教職実践研究科 教授 松本 謙一先生

1 指導の内容と指導助言

(1) 個の学びを大切にしたいグループ学習

「どんなものが電気を通すのか」という課題に対して、グループで取り組んだ。その取り組みを4段階に分けたことが有効であった。4段階とは、「①グループで決めたものについて一人一人が実験する。②一人一人の実験結果をグループで確認する。③グループの結果をホワイトボードに通す物と通さない物に分けて表す。④結果から考えたことをワークシートに書く。」である。まず一人一人が実験し、その結果をグループで確認し合ったことで、子供同士が話し合いをしたり、再実験をしたりして関わり合う姿が見られた。また、グループで話し合ったことが、全体の場での話し合いにも生かされていた。

(2) 学習意欲を高める ICT の活用

全体の話合いで、空き缶が電気を通すかどうかについて意見が分かれた。空き缶が電気を通さないとしたグループの子供たちは、空き缶に電気を通すと豆電球がついたというグループの子供の意見に驚いていた。実験をして確かめたいという子供たちの気持ちが高まったところで、実物投影機を使って代表の子供が実験を行った。クラス全員が集中し、前のめりになりスクリーンに映る実験を見守った。空き缶も場所によって電気を通すことを全員で確かめることができた。金属は、ほんのわずかでも電気を通さない物（塗料等）を間に挟んだ場合は、電気を通さないことを確認したことが、塗料をはがすと電気が通るのかどうかという次時の課題につながった。



2 講評

グループ学習を4段階に分けて行ったのは効果的だったが、全体での話し合いの中に、「実験結果」から発言する子供と「結果から考えたこと」について発言する子供が見られた。「結果」が間違っている場合は、「結果から考えたこと」は意味がなくなってしまう。結果を全員で確かめた後、話し合った方が焦点化された話し合いが成立する。

実験結果を絵カードで板書に位置付けた。絵カードを教師が整理しながら話し合いをする子供たちの意識の流れが分かりやすい。はさみや缶は、調べる場所によって結果が変わる。一カ所だけではなくて、たくさんの部分を調べないと納得しない子を育てていくことが大切である。何度も実験して調べようとするなど、未知の自然に対して自ら挑む子供が育っていた。

「明かりがつく秘密を見付けよう」という課題で単元に取り組んだ。子供たちが学習を進める過程に、秘密を見付けたいという意識が流れていけば、子供たちの話し合いの中にも「豆電球がつく秘密の一つわかったよ。」「まだ、秘密がないかな。」と言う発言が出てきたと思われる。子供の意識を大切にしたい単元構成にしたい。

しかし、自分の目で電気が通るかどうか確かめたいと目をキラキラと輝かせていた素敵な子供たちだった。

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(自由記述 道徳)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

--

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

ESD の視点を生かした学習活動を工夫するために、「ESD カレンダー」を活用し、複数の教科を関連付ける、各教科や総合的な学習の時間、特別活動との関連を図るなどして、ESD の学びが実践を伴った力として発揮されるようにしている。また、ESD 公開講座を通して指導方法の工夫改善に努めている。さらに、学年末には指導計画を見直し、次年度の実践に生かすようにしている。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

校内研修の柱を、「ESD の推進」に据え、学年主任で構成する研究推進委員会で研修計画を立案・相談し、全体研修会で共通理解を図っている。実際の研修では、低・中・高学年部会、上・下学年部会等、構成を工夫して取り組んでいる。また、ペアを組んでの「ペア研修」や OJT を踏まえた研修等の形態も工夫している。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

学期末にはアンケートを実施（児童の自己評価・保護者評価・教職員評価）し、分析結果を基に、教職員で重点目標を話し合い、取り組んでいる。その結果、児童は課題解決に向けて、友達と関わって取り組み、地域の方とのつながりを大切にしようとする児童が増えていることが分かった。今後は、身に付けさせたい資質・能力をさらに明確にし、年間指導計画の見直しを図る必要がある。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

ESD 公開授業を実施して、本校の ESD 推進の取組への助言をいただき、新学習指導要領と ESD の授業づくりとの関連を学ぶことができた。また、富山 ESD 講座委員会主催の ESD 富山シンポジウムに参加し、本校の実践を紹介したことで、児童が主体となった防災への取組について、独自の取組のよさを認めていただき、児童の実践意欲も高まった。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

金沢大学国際基幹教育院主催の「北信越ユネスコスクール交流会(H29.8)」、中部地方 ESD 活動支援センター主催の「ESD 研究会(H30.1)」、「ESD 交流会 in 北陸・長野(H30.2)」等に参加し、ESD の授業づくりや ESD 取組の発展について意見交換を行った。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

ESD 交流会や研究会に参加するとともに、教員が分担して富山県内のユネスコスクールの公開講座を参観し、相手校のよさを学ぶ機会としている。また、富山シンポジウムでは、参加校が互いに発表や質問をすることで、それぞれの地域や学校の特徴を生かした取組のすばらしさに気付くことができた。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

ユネスコスクールの認定を受けたことにより、教育課程を ESD の視点から見直し、各教科や領域等を関連付けた教育活動に取り組んできた。また「ESD の視点に立った学習指導で重視する 7 つの能力・態度」から重点的な視点を選んで授業を構想するようにした。これらのことから、伝統を大切に作る心や地域の人々とのつながりを大切に作る心が育ってきており、身近な人やもの、ことに働きかけて、自分にできることを考え、取り組もうとする児童が増えている。

- (3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

- ・各学年毎にテーマを決めて ESD カレンダーを作成し、年間を通じて実践する。
- ・各教科・領域等を関連付けて、全教育活動で ESD を推進する。
- ・子供一人一人の視点を大切にして学習活動を展開する。
 - ① 子供同士の関わりが生まれる学習環境の工夫
 - ② 多様な人との出会い
 - ③ 地域の人・こと・ものに関わる場の設定
- ・岩手県陸前高田市の方や地域の方との交流を続け、さらに防災の意識を高めるとともに、自分の生き方を考えながら、自分にできることを実践する。
- ・持続可能な開発目標（SDGs）を意識した重点目標を立て、教職員の共通理解の基に取り組む。